ANALYSE ET COMMENTAIRE DE TEXTES OU DOCUMENTS EN JAPONAIS

Durée : 6 heures

Analysez et commentez, **en japonais**, les textes suivants :

（1） 暴力に思う

スパルタ式教育の行き着く涯が問題になったのは昨年であったか。そのもとは家庭内の暴力で、耐えられなくなった親がそこへ子どもを連れて行ったのが発端だった。

暴力論はいろいろあるが、精神科医としての私には、暴力はアルコールなどの嗜癖（しへき）と似ていると思える。類似点を挙げよう。

最初の暴力は思いあまって振るわれる。それなりに意味ある暴力といってもまあいいだろう。

「いくら親でも許されない誤解だ」という子どもの気持ちを親が汲みそこねた場合など。ところが次第に「おかずが気にいらない」「呼んでも返事しなかった」「頼んでおいたものを買い忘れた」で母親を殴る、蹴るになり、最後には自分のせいでのいらだちを暴力で解消しようとする。嗜癖も暴力も次第に些細な欲求不満の解消手段になるところが同じである。手段が手近にあるからますますだ。

似た点はまだある。同じ効果を得るために次第に強い量が必要となることだ。しごきが限度をすぐ越えるのはこのためだろう。さらに、暴力も嗜癖も一種の陶酔感を生じる。これもワナだ。しかも、心からの満足は得られない。満足の代用品だからだ。こうして暴力でつながった殺風景な人間関係は無際限に続き、限りなく単色になる。双方の自尊心が低下し、欲求不満へのこらえ性がなくなり、人間的成長が止まる。何とかスクールもこの袋小路に入った。教育と体罰の議論も、この点を参考にしてもらいたい気がする。

家庭内暴力予防法を一つ挙げるなら「恥をかかせるな」だろう。日本は「恥の文化」だけあって恥のかかせ方も恥の感じ方も実に微妙で隠微（いんび）だ。子どもは実に恥じに敏感だ。傷口に塩を塗らないことと甘やかすことは全然違う。二つ目をいうとすれば人間の会話の効力は内容以上にタイミングと音調である。音域の広い「深みのある」話し声を心がけることか。

神戸大学医学部精神神経科教授・中井久夫 「神戸新聞」1984年１２月１日

（2） 家庭内暴力

家族こそは愛情と信頼で結びついていると思いたい。しかし、実際は、家族の中にも多くの暴力が存在している。

家族間の暴力は、外から見えにくく、日常生活の中で長く繰り返される傾向がある。私は、１７歳の長女に対する殺人未遂事件を起こした母親の弁護人をしたことがある。以来、民間の虐待防止団体の方と共に、この家族とのかかわりが続いている。

この家族は長く、暴力にさらされきた。母は、母親を早くに亡くし、働かない父親の元で、弟らの母親代わりをした。父もまた、酒乱の父親から激しい暴力を受けて育った。

苦労をして育ってきた２人が出会い、結婚した。物語なら、幸せに暮らしたという結末になるのだろうが、現実は難しい。

結婚した当初から、母親は夫に殴られ続けた。２人の娘が誕生した。夫は、しつけと称して、娘らによく手をあげた。特に長女に対しては激しかった。母親は、娘をかばうと、さらに娘と自分が殴られるので、かばうことも出来なかった、という。長女が中３のころ、ようやく父親の暴力も少なくなった。しかし今度は、長女が家の中で暴れるようになったのだ。

最初は、家具などの物に対しあたっていたが、だんだん母親に対し暴力をふるうようになった。長女は、母親に対して、眠るまでマッサージするよう要求するなど、自分の奴隷のように使い始めた。２歳下の次女は、母親と話しただけで長女から暴力をふるわれる。母親と話すら出来ないようになった。

その時、夫はどうしたか。「お前の育て方が悪い」と母親を責めたてたのだった。母親は追いつめられ、事件が起きた。

長女は、事件の直前に母親を殴ってけがをさせており、退院後に、母親に対する傷害容疑で逮捕された。

長女は、少年審判で少年院送致になり、母親は刑事裁判で執行猶予つきの有罪判決を受けた。長女が少年院から新築の家に帰ってくると、また、長女の暴力が始まった。

「このままでは前の事件の繰り返しになる」と、母親と次女は家を出た。今、母親は、遠方で住み込みの仕事についている。暴力の連鎖を断ち切ろうと、家族がそれぞれの生き方を模索しているところだ。

家族間の暴力の原因、背景は複雑で根深い。単に処罰するだけでは解決できない。被害者だけでなく、加害者へのケアなども含めて総合的な法的制度が必要だと痛感する。

家族間の暴力に対する救済の必要性はようやく社会的に認知されてきた。だが、まだまだ不十分な点が多い。００年５月には「児童虐待防止法」、０１年４月には、「ドメスティック・バイオレンス（ＤＶ）防止法」が成立した。これらの法律

は、とりあえずの対応策に過ぎない。例えば、児童虐待防止法では、肝心の子や親のケアについては、手つかずである。それぞれ、実効的な制度へ向けて改正をしていくことが必要だ。

例えば、英国では、子ども問題担当のソーシャルワーカーは、人口約４千人に１人の割合で配置されている（９５年現在）。日本では、児童相談所の児童福祉司は、０１年度で人口７万５千人に１人だ。大幅な増員と専門性の確保が急務である。

家族間の暴力を乗り越える取り組みは、スタートしたばかりだ。だが、関係者の熱意と市民の理解があれば、その先に光はある。

弁護士・安保千秋　「朝日新聞」２００３年5月２５日

（３）［１８歳・１６歳、幻想の迷宮］大阪・家族殺傷事件／下　身近な「死」もてあそぶ

◇学生への思い詩に

一緒に生きる相手では無く　貴方は
一緒に死ねる相手で在るから
愛しています　とても

大阪府河内長野市の家族殺傷事件に絡み、殺人予備容疑で逮捕された高校１年の女子生徒（１６）が書いた詩の一編だ。「貴方」は、母親らを殺傷して殺人容疑などで逮捕された交際相手の男子学生（１８）とみられる。「貴方」に傾倒する思いが切々とつづられている。詩のタイトルは「破滅への恋路」だった。

１日午前１時半。河内長野市の住宅街。男子学生は１階台所で、これから休もうとしていた母親を殺害した。さらに２階で弟と父親を襲い、立ち去った。その後、女子生徒に「失敗した」と電話で連絡し、落ち合った。府警河内長野署員に発見されるまで続いた「２人の空間」は約３０分。男子学生は興奮していたものの、受け答えは冷静で、女子生徒もきょとんとした様子だったという。

男子学生の父親は「長男は前夜、母親と話していたが、けんかではなかった」と言う。男子学生自身も知人に「遅くまで仕事する父親を尊敬している」と漏らしていた。また、女子生徒も自分で開設するホームページに「（家族は）許せない」と書いているものの、一方で、家族との楽しい思い出も記しており、親を殺さなければならないほどの憎悪は読み取れない。

ノンフィクション作家の朝倉喬司さんは「家族を殺すことの重大さが感じられない。現実すべてを否定する２人の幻想が肥大化した結果、自分たちの存在の源である家族でさえ否定してしまった」と分析。「従来と異なるインターネット上のコミュニケーションが虚構の世界を生んでしまう」と警告している。

「破滅への恋路」。女子生徒は、その中で心情をこう打ち明けた。

繋（つな）いだ手が離れそうになったらば
嘘迄（うそまで）吐いて　後味悪く　別れるよりは
二人で死んでしまいましょう

◇周りの人間は景色の一部

緑の山々を遠く望む住宅地、そして田園風景。大阪府河内長野市の家族殺傷事件で逮捕された男子学生（１８）と交際相手の高１女子生徒（１６）が生活していた大阪府南部は、自然と都市風景が共存する穏やかな地域だ。だが、男子学生には異質なものに映ったようだ。

「周りの人間はただの景色の一部、不特定多数の動くモノでしかない」。彼が友人に送ったメールの一節だ。親しい人々がいつの間に「モノ」に変化してしまったのか。疑問を解くために、京都女子大学の野田正彰教授（精神病理学）とともに現地を歩いた。

町工場が点在する住宅街に男子学生の家はある。道路から奥まった所に建つ、茶色の家は植え込みに囲まれていた。事件の前から、近所付き合いのない家族だったという。野田教授は「外部とのかかわりがないように見える」と語った。

女子生徒が愛読していた漫画シリーズがあった。衝撃的な「死」の場面が次々と登場する。「猟奇連続殺人」「洗脳」「多重人格」などのキーワードとともに、グロテスクなシーン、生々しい過激なタッチの描写が連続する。漫画以外にも、２人の周囲には「死」のイメージを提供する小説やインターネット情報があふれていた。

女子生徒が開設したホームページを見た野田教授は「かなり以前から『死』をもてあそび、ファンタスティック（幻想的）な世界に浸っていたのだろう」とみる。

近鉄・長野線の富田林駅。２人は駅前で人目をはばからず抱き合った。野田教授は「２人は結びつくことで、それまで、死をもてあそぶことでしか得られなかった生きる実感を感じ取ったのだろう」と言う。

同じ悲劇を繰り返さないためにと、教授は最後に強い口調で語った。

「あなたは何がしたいのか、という問いかけがこれからの教育には必要だ。自己主張を抑圧しない地域や学校の教育が求められている」

２人が頻繁に行き来した新興住宅地。夜は真っ暗だ。道を尋ねる相手を見つけられなかった２人は「幻想の迷宮」にはまり込んでしまった。

「毎日新聞」２００３年１１月５日、６日　東京朝刊から

Tournez la page S.V.P.